

中学生の攻撃性と親子関係に関する研究

小西勝一郎・野村和子

A Study on Relation of Parental Attitude and Discipline to Aggression in Junior Highschool Students

KATSUICHIRO KONISHI and KAZUKO NOMURA

序 文

戦後第三のピークと言われるように、今日青少年非行は著しい増加を示し、とくに校内暴力、家庭内暴力あるいは暴走族的行為などの粗暴な行動は、大きい社会問題として、その対策に苦心が払われてきている。

従来、傷害、暴行、破壊さらには反抗、不従順などを含めて、これらの反社会的行動は攻撃性とか攻撃の行動として研究されてきたが、今日の青少年の怖るべき行動は、必ずしも一部の青少年にみられる現象でなく、多くの青少年に共通する潜在的傾向の現れと言えるのではなからうか。小宮山¹⁾は東京都内の中学生を対象に、教師を殴りたいと思ったことの有無を調べ、あるとするもの男子の約3分の1、全くないもの約3分の2を占めたことを報告している。また鉤²⁾も大阪府下の中学生で、親を殴りたいと思ったことのあるもの約38%を見出している。もしその他のさまざまな攻撃行動をとりあげたとしても、その数はより多くを示したであろう。

Martin, B.³⁾は「攻撃は人や事物を害し、損なう目的をもった行動であり、障害を与えるには身体的、口頭的に侮蔑をもってなされる」と言うが、これらの攻撃行動は社会から否定され、受け入れられないことはいうまでもない。しかし我々の日常生活においてはより広く解し、反社会的でない、積極的活動的な行動に対し用いられることもある。むしろ社会に適応するには、リーダーシップをとり、他人に抗議をすることも必要であろう。他人に害を与え物を破壊する方法によらないで、自己主張することの望ましい場合もあろう。Lynn, B.D.⁴⁾も社会的に是認された攻撃と反社会的攻撃とを区別しなければならないと述べているが、この点でSears⁵⁾らも

すでに早くから、幼児の攻撃性を反社会的攻撃性と向社会的攻撃性に分けて親子関係とのかかわりを研究している。Sears らによると、反社会的攻撃は有害で大人に受け入れられない行動、例えば物を叩く、傷ける、泣いたりわめいたりするなど幼稚な行動を意味し、向社会的攻撃行動は子どもの能力が増し経験を積むにつれて生ずる、すなわち反社会的な人に抗議したり、その人を訴えたりするなど、社会的に容認された行動を意味している。幼児の攻撃性と青少年のそれを同じに考えることは慎重でなければならないが、青少年の攻撃性についても、反社会的一向社会的の両面から考察しておくことも意義があると思われる。

攻撃行動の定義には意図を考慮しない立場もあるが⁶⁾、Maccoby, E.E.⁷⁾は攻撃行動を「接近した攻撃のシグナルを考え、手あたりしだいに打ちまくるというより、特定の目標に攻撃を集中するという意味で意図的である」としながら、子どもの発達の間から次のように述べている。すなわち、生後二月間は真の攻撃はみられないが、相手を意識できるにつれ、要求が阻止されると、打つ、蹴る、噛むなどの身体的攻撃、脅しの身振りをともなう言葉の攻撃が現れ、さらに幼児期を通じ、遊具や遊場の確保のための争いから攻撃行動が生じる。またさらに、その後次第に他を害する意図、実行方法の判断が深まり、社会的能力の拡大につれて攻撃行動も洗練され、他と感情移入する能力が攻撃行動を変容するにいたるといふ。つまり子どもの成長とともに露骨な攻撃は減少し、いわば反社会的攻撃から向社会的攻撃へ変化することが一般的発達のパターンであろう。しかしその反面、現実にはいろいろな要因によって個人差のあることも少なくない。

Maccoby は攻撃行動の要因として、子どもの経験するフラストレーションの特質、生来性の攻撃性、大人のモデル、尊敬する大人の注意獲得などにふれ、攻撃は本能的と同時に学習され、その現れ方は社会環境の中で変化すると指摘している。すなわち攻撃行動は子どもの成長につれ適切にコントロールされるようになるとしても、行動の場の条件と経験、学習のあり方によって、個別的にはその現れも多様な違いを示すことになるのであろう。

このような諸要因のうちで、親の態度としつけは子どもの攻撃行動と大きいかわりをもつといえよう。我国の家庭内暴力少年に過保護の親が多く、校内暴力少年に拒否、厳格、放任などの親も少なくないことは、一般によく指摘されてきたところである。Farrington, P. P.⁸⁾ も8才から18才までの暴力非行少年の縦断的研究において、暴力的でない非行少年の親にくらべ、前者の親に、より冷たく、厳しく、放任的で監督不十分であることを報告している。その他いろいろな年令の子どもの攻撃行動に関する多くの研究は、親の罰の厳しさ、暖かさの欠如、拒否、父母間の不一致、親の攻撃行動のモデルなど子どもへの好ましくない親の態度との関連を示してきている。またMaccoby もふれているように、子どもの攻撃への親の激励とか、他人への理解についての指導のあり方も大きいかわりをもつとも思われる。

本研究は上述する立場から、現代中学生の意識を通じてではあるが、彼らの攻撃傾向を反社会的及び向社会的攻撃の両面から探り、これと関連の大きいと思われる親の態度としつけのあり方を調べ、両者のかかわりを吟味しようとした。なお次のような假定をたてて検討した。

1. 子どもの反社会的攻撃傾向は好ましくない親の態度としつけに関連する。

2. 子どもの向社会的攻撃傾向は好ましい親の態度としつけと関連するであろう。向社会的攻撃はむしろより社会化されたものと考えられるからである。

調 査 の 方 法

1. 対象

調査の対象は大阪市内の三つの公立中学校(TN, YU, TA)の1, 2年生322名(男子170, 女子152)であった。TNとYUの中学校は大阪市内の中心から南寄りの、TAの中学校は西南に位置した地区にあり、ともに中小商業と住宅が混合しているが、後者に比較的職業婦人の家庭が多いという。しかしいずれにしても、対象となった中学生には臨床的に著しい反社会的攻撃行動を認めない(明らかでない)生徒諸君であった。

なお後にふれる手続きによって、回答の適切でないと思われる資料を省いたから、最終的な対象人数は計272名(男子139, 女子133)となった。

2. 手続

調査は質問紙法によった。攻撃性に関する質問によって生徒自身に自己評価させ、また親の態度しつけに関する質問によって、彼らの認知した親子関係を調べた。親の評価より子ども自身の認知そのものをより重視したからである。

攻撃性に関する質問はSearsらの研究を参考に、反社会的攻撃について17問、また向社会的攻撃に5問を設けた。前者に含まれる内容は、身体的攻撃(例、「私は人を叩いたり、人に物を投げつけたりすることがある」)3問、威嚇(例、「私は思った通りにならないと、物を投げるまねや、人を叩く格好をして脅すことがある」)2問、間接の身体的攻撃(例、「私は友達やきょうだいのものをわざと壊したりすることがある」)、言葉による直接攻撃(例、「私はしつこく人をからかう」)3問、言葉による間接攻撃(例、「私は腹のたつことがあると、独りでぶつぶつ文句を言う」)2問、代償的攻撃(例、「私は人が失敗しているのを見て愉快に思う」)2問、事物損傷(例、「私は腹がたつとそばのものを投げる」)2問、いたずら迷惑をかける(例、「私はしてはいけないことをしてしまう」)2問などのカテゴリーからなっている。また向社会的攻撃については、他人の行動に賛成しない(例、「私は悪いことをしている人に注意することができ」)、親や教師への通報(例、「私はいたずらをしている子を見たら、親や教師に知らせる」)2問、仕返し請求(例、「友達にいじめられたら、先生に言って叱ってもらう」)2問のカテゴリーからなっている。Searsの設問は調査対象が幼児であったが、本研究では中学生が対象であったから、質問内容の表現を適当に改めたが、とくに向社会的攻撃の質問になお検討の余地が少なくないと思われる。本研究の結果を手がかりとして、さらに適切な質問の構成につとめたい。

なお回答の信頼性を高めるため、MMPIの虚構尺度から10質問を選び、また質問紙の前半と後半に相反する内容の同一傾向を意味する質問(身体的攻撃に関する質問)を加えた。また攻撃性に関する被験者の印象を和らげる配慮から、攻撃とは無関係な質問を適宜配列した。

ちなみに虚構質問(各問の回答に1ないし4得点を与えて整理)の結果は、平均25.49(SD 3.68)得点であり、最低15から最高36得点の範囲を占めていた。これにより21得点以下のものの資料は省いた(該当者50名)。また同一内容の質問の一致度は81%, 相関係数0.83で

あった。

親の態度しつけに関する質問は、序説にふれた攻撃性と関連が深いと思われるものを中心に、筆者らのこれまで用いてきた親子関係の調査表⁹⁾から、次の質問を選んだ。すなわち、親の愛情、しつけの厳しさ、行動の拘束、一貫したしつけ、賞と罰の多(小)、叱責の厳しさ、親子間の葛藤、家庭内の葛藤の9質問と、さらに親への同一視に含まれる親への親しみ(好み)、類似、尊敬の3質問、またMaccobyの示唆した弱者への配慮、他の人への理解、けんかして帰宅した時の親の指導のあり方など3質問を加えた。

3. 調査の日時と場所

調査は昭和57年10月に実施した。各中学校の教室において、担任の指導により集団的に行った。

結果と考察

1. 攻撃性について

反社会的攻撃性と向社会的攻撃性の質問に対する回答に1から4の得点を与え、それぞれの攻撃性得点を算出した。得点の高いほどその攻撃傾向が強いことを意味している。

1) 反社会的攻撃性の場合

反社会的攻撃性の得点による人数分布は表1の通りであった。平均得点34.10 (SD 5.84) であり、最高54得点から最低18得点の範囲に分布していた。なお男子の平均得点は35.00 (SD 6.29)、女子の平均得点は33.86 (SD 5.29) であった。Sears, R.R. とかMaccoby, E.Eは女子より男子の攻撃性が有意に大きいというが、本研究の結果も有意ではないがその傾向はうかがえる。

表1 反社会的攻撃得点の人数分布

得点	男	女	計
50 ~ 54	4	2	6
45 ~ 49	6	3	9
40 ~ 44	19	14	33
35 ~ 39	30	39	69
30 ~ 34	45	46	91
25 ~ 29	18	27	45
20 ~ 24	6	2	8
19	1	0	1

表2 向社会的攻撃得点の人数分布

得点	男	女	計
14 ~ 16	3	6	9
13	3	4	7
12	8	10	18
11	14	18	32
10	22	23	45
9	23	19	42
8	31	27	58
7	19	18	37
6	11	7	18
5	5	1	6

($t=1.32, 0.10 < P$)。

2) 向社会的攻撃性の場合

向社会的攻撃性の得点による人数分布は表2の通りである。最高得点16から最低得点5の範囲内で、平均得点9.12 (SD 2.09)、男子の平均8.89 (SD 2.09)、女子の平均9.36 (SD 2.07) 点を示した。男子より女子にやや高い傾向を認め ($t=1.88, P < 0.10$)、反社会的攻撃性の場合と逆の方向をとっている。われわれは向社会的攻撃性をより成熟したタイプの攻撃性と考えてきたが、さらに攻撃性にかかわる性別の違いも考慮しておかねばなるまい。

3) カテゴリー別得点について

反社会的及び向社会的攻撃性に含まれる質問数がカテゴリーによって統一されていないから、各カテゴリー1問当たりの平均得点を算出し、攻撃性の内容における重みを検討した。表3の結果を得た。

統計的検定は省略したが、表3から全体的傾向を探ると、「いたずらや迷惑をかける」、「間接の言葉による攻撃」が全体の平均をこえて高く、「間接の身体的攻撃」、「身体への脅迫」は低い傾向がうかがえる。その他のカテゴリーはこれらの中間を占めているといえよう。それは男子においても女子においても同じ傾向を示しているが、男子に「間接の身体的攻撃」、「直接の言語的攻撃」の傾向が、女子に「間接の言語的攻撃」、「事物の損傷」の傾向がみられるようである。「直接の身体的攻撃」は女子より男子に若干平均得点は高いが、ともに顕著ではなかった。一般中学生が対象となったことによると思われる。

次に向社会的攻撃性については、全体として「不賛成

表 3 攻撃性のカテゴリー別得点

	カテゴリー	男 子	女 子	計	総得点 に対する 百分比(%)
反社会的 攻撃性	1.直接の身体的攻撃	2.08	1.98	2.03	18
	2.身体への脅迫	1.59	1.50	1.54	9
	3.間接の身体的攻撃	1.32	1.16	1.24	4
	4.直接の言語的攻撃	2.32	2.04	2.18	19
	5.間接の言語的攻撃	2.24	2.43	2.33	14
	6.代理の攻撃	2.04	1.90	1.97	11
	7.物をいたみつける	1.89	2.04	1.97	11
	8.いたずら・迷惑	2.38	2.46	2.42	14
	計(平均)	2.05	1.99	2.02	100
向社会的 攻撃性	1.不賛成を唱える	2.45	2.26	2.36	26
	2.大人への通報	1.71	1.82	1.77	39
	3.仕返しの請求	1.53	1.74	1.63	35
	計(平均)	1.78	1.87	1.82	100

をとなえる」が平均をうわまわって高く、「仕返しの請求」が最も低かった。この傾向は男女とも同様であるが、男子に言語的 direct 手段をとり、女子に間接的手段をとる傾向がみられる。攻撃性表現の手段としては、反社会的攻撃性の場合と違わない性差を示すものといえよう。

以上の結果はSearsらの研究結果とは必ずしも一致していないが、調査対象と調査手続きの違いから当然のことかもしれない。Searsらは女子幼児の告げ口が多い傾向について、男子より女子の言葉の成熟が早いこともその一つの理由としているが、本調査の中学生においては、女性に特有な身体的弱さから生じるものとも考えられる。間接の言語的攻撃とか仕返しの請求などもこの一つのあらわれといえそうである。

以上この研究の対象となった中学生の攻撃性については、ここでとりあげた反社会的、向社会的攻撃行動においていろいろな手段がとられていること、またそれぞれに軽重のあることが示唆された。ただ臨床的な対象ではなかったためであろうが、人や物に傷害を与えるという攻撃行動というより、比較的軽い内容のものに重点がおかれていたといえそうである。なお本研究では各質問ごとの総計をもって攻撃得点を算出したが、上述のように各カテゴリーごとに重みと質問数に違いがみられた。表3の右欄に総得点に占める比率を示しておいたが、全体としての攻撃得点はこれらの重みを含みにしていることを注意しなければならない。またこれの検討は将来にまきたい。

表 4 親の態度取扱い(平均得点)

	父子関係			母子関係		
	男	女	計	男	女	計
1 親しき(好み)	3.92	3.92	3.92	4.05	4.14	4.09
2 類似	2.90	3.10	3.00	2.77	3.06	2.92
3 尊敬	3.70	3.63	3.67	3.72	3.68	3.70
4 親の愛情	3.77	3.90	3.83	3.88	3.92	3.90
5 しつけの厳しさ	3.74	3.68	3.71	3.60	3.84	3.72
6 行動の拘束	2.85	2.81	2.83	2.90	3.03	2.97
7 しつけの一貫性のなさ	2.78	2.72	2.75	2.78	2.93	2.86
8 親子間葛藤	2.19	2.34	2.26	2.57	2.87	2.72
9 賞の多(少)	3.63	3.70	3.67	3.68	3.83	3.76
10 罰の多(少)	4.17	4.05	4.11	4.25	4.34	4.30
11 叱責の厳しさ	3.89	3.81	3.85	3.66	3.86	3.76
12 弱いもののいじめの禁止	4.05	3.82	3.93	4.01	4.00	4.00
13 他人の理解	3.31	3.40	3.35	3.46	3.69	3.57
14 家庭での葛藤	2.50	2.62	2.55			

2. 親の態度取り扱いについて

各質問の回答に1～5得点を与え整理を行った。得点の高いほどその傾向の強いことを示すものとした。なお「けんかして帰宅後の親の取り扱い」に関する質問のみは、選択肢による回答を求めている。表4の結果をえた。統計的検定を略し、およその傾向をふれておきたい。

まず父子関係について、全体としては、親子間の葛藤が最も低く、行動の拘束、しつけの一貫性のなさに低い傾向が認められるが、他の親の態度取り扱いは大部分好ましい得点を示していた。男女ともにこの傾向は同じである。母子関係においても、上述の父子関係にみられた傾向は同じく認められた。しかし類似、叱責の厳しさをのぞき、他の項目はすべて父より母の得点が若干ではあるが高い傾向があった。母の子どもとの接触、良いにつけ悪いにつけ家庭のしつけの中心となっているからであろうか。なお家庭の葛藤状況も比較的好ましい傾向である。

最も高い得点を示した質問は、父子、母子関係をとわず、男女とも、親の罰が多いというものであった。青少年にとって親の罰は現実には多いのか、あるいは罰は彼らに敏感に受けとられているのか、いずれにしてもそれが攻撃行動にどうかかわっているかは後に検討したい。また攻撃性とかかわりがあると考えて調べた質問、弱いもののいじめの禁止、他人の理解についての親の指導について

表5 けんかに負けて帰宅した時

親の態度	父	母
1. やりかえせという	20%	6%
2. かかわるなという	18%	40%
3. 慰めてくれる	8%	18%
4. けんかするなという	19%	29%
5. その他	5%	3%
人 数	266名	265名

も、父母ともに比較的多く行なっているようで興味深いものがある。なお同様な見地から設けた「けんかに負けて帰宅した時の親の扱い方」の質問の結果は別に整理したが、表5の通りとなった。父にやりかえしを求め、母に穏健な行動をすすめる傾向がうかがえる。かつてNewson, J.¹⁰⁾らは、幼児の仲間遊びでの争いで、母の61%は攻撃に打ち勝つよう指示するというが、調査条件の違う本研究との直接の比較はできない。

本調査の対象となった中学生の親子関係は、上述の結果を総合して、ごく一般的な、とくに好ましくないものは少ないと考えてもよさそうである。

なお親子関係は極めて複雑な人間関係であり、ここにとりあげた個々の親の態度としつけは互いに重複して子どもに影響するものであろう。しかしこの点については別に考察することとし、本研究では個々の親の態度としつけごとに、攻撃性との関連を検討した。

3. 攻撃性と親の態度としつけとの関係

中学生の攻撃得点とその認知した親の態度としつけ得点との相関（ピアソンの相関係数による）を調べ、表6及び表7の結果をえた。すべて高い相関を示すとはいえないが、表中の米印3個は1%以下の、2個は2%以下の、1個は5%以下の、また十印は10%以下の危険率にて相関が0でないことを示している。なお十印の親の態度としつけについては、以下の解説において括弧をつけてある。

1) 反社会的攻撃性の場合

反社会的攻撃性と親の態度としつけの関連をまず男子についてみると、父子関係において、父への親しみ、尊敬、叱責の厳しさで負の相関が、またしつけの一貫性のなさ、親子間の葛藤で正の相関が認められた。すなわち反社会的攻撃傾向の男子の父は、子への親しみも尊敬されることも乏しく、一貫したしつけと叱責も厳し

表6 反社会的攻撃性と親子関係の相関

親の態度		男子	女子	合計
1. 親しき	父	-0.25 ***	-0.27 ***	-0.26 ***
	母	-0.23 ***	-0.25 ***	-0.25 ***
2. 類似	父	-0.03	-0.22 **	-0.11 *
	母	-0.07	-0.13	-0.10 *
3. 尊敬	父	-0.21 **	-0.28 ***	-0.24 ***
	母	-0.22 **	-0.24 ***	-0.19 ***
4. 親の愛情	父	-0.14	-0.26 ***	-0.20 ***
	母	-0.15 *	-0.26 ***	-0.15 **
5. しつけの厳しさ	父	0.04	0.07	0.05
	母	-0.23 ***	-0.03	-0.13 *
6. 行動の拘束	父	0.06	0.17 *	0.11 *
	母	-0.11	0.16 *	0.02
7. しつけの一貫性の欠	父	0.26 ***	0.34 ***	0.28 ***
	母	0.12	0.35 ***	0.24 ***
8. 親子葛藤	父	0.34 ***	0.25 ***	0.33 ***
	母	0.42 ***	0.34 ***	0.37 ***
9. 賞の多少	父	-0.12	-0.18 *	-0.15 **
	母	-0.09	-0.16 *	-0.12 *
10. 罰の多少	父	-0.12	-0.11	-0.10
	母	-0.11	-0.07	-0.09
11. 叱責の厳しさ	父	-0.15 *	0.02	-0.08
	母	-0.14	-0.00	-0.03
12. 弱いもののいじめの禁止	父	-0.03	0.04	0.02
	母	-0.05	0.09	0.04
13. 他人の理解	父	0.03	-0.04	-0.01
	母	0.03	-0.02	0.01
14. 家庭の葛藤		0.33 ***	0.27 ***	0.25 ***

に欠け、親子間に争いが多いといえよう。また母子関係においても、母への親しみ、尊敬、(母の愛情)、しつけの厳しさに負の相関を、親子間葛藤に正の関連を認めた。父母間に若干の関連の違いはあるが、関連の方向は同じであり、はじめの假定にそって、反社会的攻撃傾向と好ましくない親子関係の傾向がみられた。

次に女子について、まず父子関係ににおいては、親しみ、類似、尊敬、父の愛情、賞の多少で負の相関を、行動の拘束、しつけの一貫性のなさ、親子関係の葛藤で正の関連があった。すなわち反社会的攻撃傾向の女子は、父への同一視に乏しく、父の愛情を感じることも少なく、行動の拘束を受け、しつけの一貫性に乏しく、賞を

うけることも少ないと考え、親子間も葛藤がより多いといえそうである。同様に母子関係においても、母への親しみ、尊敬、母の愛情、(賞の多少)に負の関係を、しつけの一貫性のなさ、(行動の拘束)、親子間葛藤に正の相関があった。

なお男女ともに家庭の葛藤状況について、攻撃性との正の相関が見出されている。親子間葛藤とともに家庭内の緊張が子どもの攻撃行動と結びつくことは、ように理解できそうである。

表6の合計欄は男女統合した結果であるが、上述の男女別の場合とほぼ同様の傾向を認めることができる。

以上のように、反社会的攻撃と親子関係のかかわりについて、とりあげた全ての親の態度しつけが攻撃傾向と有意に関連するとはいえなかった。しかし親への同一視、親の愛情、しつけの一貫性、親子間と家族内の葛藤など正負どちらの相関にしても、予想どおり明確な傾向をみたことは、従来なされてきた研究にほぼ近いといえよう。ただし攻撃性と深いかかわりがあるとされる罰の多少、叱責の厳しさは予想に反した結果であり、また弱いもののいじめの禁止、他人への理解なども、罰とともに親のしつけとして比較的多くなされているものでありながら、予想の傾向を発見するにいたらなかった。これらが親子関係の基本というより、しつけの技術的なものにより近いことによるのか、あるいはこれらの技術はむしろ幼少期に効果的であるのか、さらに臨床的なケースも加えて検討する必要がある。

2) 向社会的攻撃性の場合

向社会的攻撃性と親の態度取り扱いの関連は表7に示す結果となった。相関は低いが、父-息子関係において、親への類々と尊敬、賞の多少について正の関連を認めた。また母-息子の関係で、母への(親しみ)、類以、尊敬、賞の多少、叱責の厳しさ)にやはり正の相関がみられた。また父-娘関係では、父のしつけの一貫性のなさ、(賞の多少)、弱いもののいじめの禁止に正の関連を、母-娘関係で、母への尊敬、(しつけの厳しさ)、しつけの一貫性のなさ、賞の多少、叱責の厳しさ、弱いもののいじめの禁止に正の関連を、(親子間の葛藤)に負の関連が見出された。表7の合計欄は男女総合した結果であるが、男女別個にみられた傾向が加重あるいは相殺された関連を示している。

以上の結果は反社会的攻撃性の場合のように必ずしも明確な傾向を示すとはいえないようである。男子にみられた類以、尊敬など親への同一視と賞の用法など、はじめの假定にそった好ましい親子関係を示すものといえよう。しかし女子の場合には、母への尊敬、賞が多く、弱いもののいじめの禁止、親子葛藤の少なさなど、予想に

表7 向社会的攻撃性と親子関係の相関

親の態度		男子	女子	合計
1. 親し	父	0.10	0.09	0.09
	母	0.16 +	0.09	0.13 *
2. 類	父	0.22 **	0.13	-0.18 ***
	母	0.22 **	0.12	0.19 ***
3. 尊	父	0.17 *	0.10	0.13 *
	母	0.24 ***	0.17 *	0.19 ***
4. 親の愛情	父	0.13	0.01	0.06
	母	0.12	0.04	0.09
5. しつけの厳しさ	父	0.02	0.07	0.02
	母	0.06	0.16 +	0.10
6. 行動の拘束	父	0.09	0.03	0.04
	母	0.02	0.00	0.02
7. しつけの一貫性の欠	父	0.01	0.27 ***	0.15 **
	母	-0.10	0.26 ***	0.03
8. 親子葛藤	父	-0.04	-0.05	-0.04
	母	0.07	-0.17 *	-0.06
9. 賞の多少	父	0.19 *	0.17 +	0.17 ***
	母	0.28 ***	0.19 *	0.24 ***
10. 罰の多少	父	0.01	0.12	0.08
	母	0.02	0.11	0.08
11. 叱責の厳しさ	父	0.14	0.09	0.12 +
	母	0.16 +	0.19 *	0.19 ***
12. 弱いもののいじめの禁止	父	0.05	0.17 *	0.10
	母	0.12	0.18 *	0.15 **
13. 他人の理解	父	0.09	0.11	0.10
	母	0.08	0.06	0.09
14. 家庭の葛藤		0.08	-0.06	0.02

そった傾向もみられるが、しつけの一貫性の欠、叱責の厳しさなど、むしろ假定に反し混乱した結果も見出されている。これらの問題が女子に特有なものであるか、向社会攻撃性としてとりあげた質問内容が適切であったかどうかなどさらに検討の余地がありそうである。

3) けんかにかけて帰宅した時の親の扱い

「けんかにかけて帰宅した時親はどう言いますか」に対する回答を、各選択肢ごとに肯定群と否定群に分け、それぞれの反社会的攻撃得点と向社会的攻撃得点を算出し、両群の得点を比較した(t検定による)。

まず反社会的攻撃得点では肯定、否定両群間に有意な差を認めなかった。しかし向社会的攻撃得点では、「父

が慰めてくれる」場合、肯定、否定群それぞれの得点平均9.90と9.02であり、「母がかかわるなと言う」場合、同じくそれぞれ平均得点9.36と8.91、また「母が慰めてくれる」場合、それぞれ9.58と9.02であり、すべて10%の危険率内にあった。つまり反社会的攻撃傾向について予想した結果はえられなかったが、向社会的攻撃傾向については、有意ではないが、攻撃を奨めるよりは慰め諭す親の指導が効果的のように思われる。

結 語

中学生を対象に質問紙により、彼らの攻撃性（反社会的攻撃性と向社会的攻撃性）と親の態度としつけを調べ、両者の関係を検討した。

次の結果がえられた。

1. 反社会的攻撃性のうち、男女ともに、いたずらや迷惑をかける、間接的な言葉による攻撃、直接言葉による攻撃得点が高く、全体として軽度の攻撃行動が多いようであった。女子より男子にやや高い攻撃傾向がうかがえる。
2. 向社会的攻撃性のうち、不賛成を唱える攻撃得点の高い傾向が認められ、全体として男子より女子に向社会的攻撃傾向があった。
3. 親の態度としつけでは、父母ともに罰の多少、親しみ、弱いものいじめの禁止で得点が高く、親子間の葛藤、行動の拘束、しつけの一貫性のなさにて低い傾向がみられた。男女間に著しい違いがなく、全体として中学生の認知した親子関係は好ましいと考えられた。
4. 攻撃性と親子関係の関連については、親と子の性別により必ずしも同じではないが、反社会的攻撃性と好ましい親の態度としつけに負の、好ましくないそれと正の関連があった。従来の研究にそって、親への同一視、親の愛情、しつけの一貫性、親子及び家庭の葛藤状況とのかかわりが見出されたが、罰を含めしつけの技術に関するものについては明確な結果をえられなかった。

向社会的攻撃性については、親への同一視のほか、賞の多少、弱いものいじめの禁止など、好ましい親子関係ではあるが、反社会的攻撃の場合とは違った親のしつけが見出された。とくに女子において、しつけの一貫性のなさ、叱責の厳しさなど假定に反する結果も認められたが、その理由は明らかでない。

以上見出された結果は従来の諸研究と一致するものとともに、明確でない、相反する結果も認められた。さらに調査の対象と方法を改め検討する余地は少なくない。

最後に本研究を進めるにあたり、御高配と御協力をいただいたTU、YU、TA各中学校の諸先生と生徒諸君に、

また大阪少年補導協会の斎藤先生に厚く御礼申しあげます。

(以上)

参 考 文 献

1. 小宮山要他、中学生による教師暴力の背景的要因に関する研究、1981、第23回日本教育心理学会発表論文集
2. Martin, B., Parent-Child Relationship, Review of Child Development Research, vol. 4, 1975
3. 釣治雄、中学生の家庭生活意識Ⅲ 関西心理学会94回大会発表論文集 1982
4. Lynn, B.D., The Father, 1978, (今泉信人他共訳)
5. Sears, R.R., Rau, L., Alpert, R., Identification and Child Rearing, 1965
6. 高嶋恭子、攻撃的行動の獲得機序に関する研究、教育心理学研究18巻3号, 1970
7. Maccoby, E.E., Social Development, Psychological Growth and Parent-Child Relationship, 1980
8. Farrington, D.P., The Family Backgrounds of Aggressive Youths, Aggression and Anti-social Behaviour in Childhood and Adolescence, Edited by Hersov, L.A., etc. 1978, 73-94
9. 小西勝一郎、丹下庄一、堀真一郎、吉川輝夫、問題少年の親子関係と人格形成、大阪府青少年問題に関する研究報告書 昭和48
10. Newson, J., Newson, E., Four years old in urban Community, 1968

(昭和58年11月8日受理)

Summary

The purpose of this study was to investigate by questionnaire the relation of the (antisocial and prosocial) aggression of junior high school students to their parents's attitude and discipline.

The results are as follows:

- (1) Antisocial aggression is positively related to low identification, low affection, inconsistent discipline, high parent-child conflict, and high family conflict.

However no positive relation is found between severe punishment and antisocial aggression, though many other studies have pointed it out.

- (2) Prosocial aggression is positively related to high identification, parent's approval, and inhibition of bullying.

Contrary to our expectation, a positive relation is seen between inconsistent discipline and severe scolding, and prosocial aggression. No reason for this result could be thought out.